

俺の青春ラブコメは間違っただけでいいなかった。

ブレイド

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

初投稿作品です。

原作の12巻を読んでいてもたっていられなくてかきはじめることにしました。

駄文になると思いますがよろしくお願いします。

原作12巻まで読んでることが前提なので、12巻まで読んでいない方はご注意ください。

ハーメルン初利用ということもあり、機能を最大限に生かせないと最初思いますのでご了承ください。

物語は12巻の終わりの続きからとなります。楽しんでいただけるとかどうかはわかりませんが、温かい目で見守ってくださいれば助かります。

## 目次

そして雪ノ下陽乃と葉山隼人は立ち塞がる (1)	1
そして雪ノ下陽乃と葉山隼人は立ち塞がる (2)	4
“本物”よりも“偽物”を求めていた	12
一色いろはは“本物”をとりこぼす	17

## そして雪ノ下陽乃と葉山隼人は立ち塞がる（1）

平塚先生は時間を作るといつていた。作るといった表現をつかった以上、事態は自分が思ったよりも悪い方向に早いスピードで進んでいるのであろう。雪ノ下の母親が関わってきた瞬間からこの事態は始まっていたのであろう。

そんなことはわかりきっていたはずなのに、雪ノ下の言葉を尊重し、雪ノ下陽乃の言葉から目を背けた結果がこうなってしまった。いや、違う。俺は雪ノ下の言葉など尊重していなかった。押し付けてしまったのだ。いつかの時みたいに俺は、雪ノ下雪乃に自分の理想を押し付けてしまったのだ。雪ノ下が一人でやり遂げ、一人でその夢の理想を成し遂げる、そんな凛々しい彼女を想像し、遠目から見ることに決意してしまったのだ。だがそれは間違いである。

まだ間に合う。彼女がやり通したたかかったものをまだ守れるチャンスがそこにある。

学校へ着くといそいで職員室に向かった。職員室の前で待っていたのは意外な人物達が待ち受けていた。

「やつはろー、比企谷君」

「やあ、比企谷」

「陽乃さんになんで葉山が？」

雪ノ下陽乃はいつも通り陽気な笑みで、葉山は申し訳なきような顔でそこに立っている。

「今回、プロムが中止になったことに大きく関係してるからだ、比企谷」

職員室からでてきた平塚先生の第一声はそれだった。

「どういうことですか。陽乃さんはともかく、どうして葉山まで関係してくるんですか？」

「うちの親と隼人の両親が手を組んでこのプロムに手を出したからだよ、比企谷君」

疑問の答えを陽乃さんが答える。つまり、雪ノ下の母親と葉山の両親が協力してこのプロムの中止に賛成したってことか。なるほど、た

しかにそれならこの二人がいることもうなずける。

「すまない、比企谷。彼女がやりたかったことをこんな形でつぶしたくはなかったのだけど」

「別に。葉山のせいじゃねえだろ。それにまだ中止が決まったわけじゃない」

「そうだ。こんな形で雪ノ下雪乃のやりたかったものをつぶさせてたまるか。」

「今回の状況はかなり厳しいぞ、比企谷。雪ノ下の母親と葉山のご両親はすでに多くの保護者を味方につけている。それにPTAもだ。そんな中を一生徒である君ができることはあまりにも少ない」

平塚先生が厳しい状況を伝える。考えろ、比企谷。この状況をひっくり返せる一手を。大勢の保護者が反対してる状況を、一気にプロム開催に賛成に変える状況を考えるんだ。過半数以上がプロム開催に賛成しなければ、プロム開催どちらにせよ危うい。そしてなにより、あの雪ノ下の母親が納得させることが大事なのだ。

「二人に、手伝ってほしいことがあります」

俺は遠慮がちに、だがしかし、まっすぐ二人を見据えて言葉を綴った。

「なるほどね。比企谷君なかなかえげつないこと考えるね」

陽乃さんは楽しそうにニコニコとしている。葉山も神妙な顔つきで、だが重い顔している。

「確かにその方法なら希望があるね。それでも雀の涙程度だけど」

陽乃さんは冷静に俺の作戦を分析する。そして

「それに、私は『今のままの比企谷君』じゃあ手伝えないかな」

やはり一筋縄ではいかない。だがこの人の協力なしではこの作戦は実行には移せない。

「すまない比企谷、俺も『今のままの君』では手伝えそうにない」  
「なっ」

葉山の言葉は意外だった。少なくとも葉山は先ほどまで現状を残念がっていた。だから少なくとも葉山は手伝ってくれると思っていた。

「へー隼人まで断るのはちよつと意外。まあいいわ。比企谷君、時間をあげる。今夜までなら空けとくからそれまでに『答え』をちようだい。じゃあまたね、比企谷君」

手を振って、雪ノ下陽乃は先に校舎を後にする。

「俺も部活があるからいくよ、比企谷」

そう言い残し葉山もこの場を去る。なにもかもが上手くいかない。一体どうして。一体どこで間違ってしまったのだろうか。そして、『今のままの俺』ではというのは。いや、比企谷八幡はその答えを知っている。むしろ俺が今まで探し求めてきたものだ。そしてその探していたものはもうとっくに見つかっている。

「比企谷、どうにかするにしても、まず雪ノ下に会って行ったらどうだ。雪ノ下なら生徒会室にいるはずだ」

平塚先生にそう促されるが、首を横にふる。今、雪ノ下に会ってしまつたら、『答え』をだしそびれてしまいそうだから。

「平塚先生、一日だけでいいです。なんとか中止決定を延ばしてください」

「一日だけでいいのかね？」

「はい、あの二人さえ味方につければ時間の猶予はもう少しできるはずです」

「そうか。ならなんとかしよう」

『今のままの俺』でだめなのであれば今変わる必要がある。そうでなければ、いつか雪ノ下を助けると交わした約束はなくなってしまふのだから……。

その約束を反故にしないために、おれはまず一人目の協力者候補のところへむかうのだった。

## そして雪ノ下陽乃と葉山隼人は立ち塞がる（2）

葉山隼人は言葉通り部活に行っていた。部活をしている葉山は傍から見てもカッコよくて、輝いている。ボッチであるおれとは雲泥の差だ。だがしかし、そんな雲泥の差がある葉山であるからこそ、頼らなければならぬ。葉山に向けて手を挙げ、話があると合図する。葉山はそんな俺をみてため息をつき、こちらへと駆けてくる。

「もう話しは終わったと思っただけだな」

葉山はこちらに目を合わせようとすらしめない。明後日のほうをみながら話す。

「そっちにはなくてもこっちはまだあるんだよ。……さっきの話、断った理由聞いてもいいか？」

「言っただろ、俺は君が嫌いだって」

「それだけが今回断った理由じゃないだろ。少なくともお前は、俺のことが嫌いって理由だけで雪ノ下の努力が無下になることを望むやつじゃない」

言葉の通りだ。葉山は俺のことが嫌いで、俺も葉山が嫌いである。むしろ大きっらいである。だが、今回のことは腑に落ちない。葉山はまだ俺と目を合わせようとしない。ずっと明後日の方向をむいたままである。

「俺は救えなかったんだよ。『彼女』を」

ここでいう『彼女』が、誰を指すかは言うまでもない。

「小学生のころの話さ、嫌がらせを受けていた彼女をかばったんだ。こんなことをするのは間違っている、もうやめようって。俺はそれで彼女への嫌がらせは止まると思っていた。でも間違いだった。彼女への嫌がらせはひどくなっただし、それどころか俺にも嫌がらせがくるようにもなった。シヨックだったよ。それまでみんなとは仲良しだったからね。だから俺は庇うことをやめた。逃げたんだよ、俺は」

葉山はこちらを向かない。ただ、目はいつ泣き出してもおかしくないほど悲し気なものだった。

「間違いだと気づいたときはもうなにもかも手遅れだったよ。俺は自

分から放り出してしまつたんだよ、自分が一番大切だったものを」

不意に夏休みでの出来事が脳裏に浮かぶ。戸部が葉山にしつこくきいてやつとききだせた葉山の好きな人のイニシャル、「Y」。

「俺は君が羨ましくて、そして憎くて仕方なかつたんだ。いや違うな、今も憎くて仕方がないだな。彼女を助けだそうともがいている君が」  
「それが俺を手伝えない理由か？だとしたら雪ノ下はとんだ風評被害だな」

「これも前にいっただろ、俺はみんなが思っているほど良いやつじゃないって」

苦笑いをし、そして葉山はようやくこちらを見据える。これまでにないほどに怖い顔で。

「比企谷」

そして葉山は尋ねる。

「そこまでして彼女を助ける理由はなんだ？」

その言葉は、俺が今まで生きてきた中で一番胸の奥に響く。

「まさか、ただの部活仲間だからとはいわないよな？」

返答によつては拳が飛んできそうなほど、葉山の顔殺気立っている。

「結衣の気持ちにも気づいているんだろう？そして「彼女」の気持ちにも。「答え」を出さないままでいる君を手伝うわけにはいかない」

そうだ、俺はここにきて葉山を、そしてこの後向かい合わなければならぬ雪ノ下陽乃を味方にするにはこの「答え」を出さなければならぬ。

俺は「本物」がほしいとあの二人に言ったのに、言った当の本人がその「本物」を避けて、偽物に依存し合ってしまったのだ。いや、きつと俺だけじゃないのかもしれない。由比ヶ浜も雪ノ下も気づいていたはずだ。ただ怖かつたのだ。一度「本物」を手にしてしまえば、また偽物をつかみなおすわけにはいかないのだから。

「わからねえ。俺にはまだ「本物」がどつちかなんてわからねえ」「本物」？」

葉山が不思議そうな顔をする。当然だ、初めてきいたら、いや何度



聞いてもわけのわからない言葉だ。だがしかし

「約束したんだ！雪ノ下は言ったんだ！」

いつのまにか俺は声を荒げている。柄にもなく、大きな声で。サッカー部の連中の動きは止まってこちら見ているがそんなことは関係ない。

『いつか私を助けてね』って、そう言ったんだ！俺にそう言ったんだ！この言葉は絶対「本物」だ！そして俺はこの「本物」を守るんだ！今はそれしか考えてねえ！」

「答え」を出さなければならぬときはもうすぐそこまで迫っている。だが、今の俺はおろかにもその「答え」が出せずにいる。葉山の胸倉をつかんで叫びあげる。俺の今の想いを。涙がいつの間にか流れていた。脳裏をずつと駆け巡る、奉仕部の今までを。助けてねといった雪ノ下のあの顔がずつと頭から離れない。ここへ来る前に突然涙を見せた由比ヶ浜の顔が頭を離れない。どっちの顔も頭から離れないんだ。

「ふふ、ははは」

葉山は突然大きな声で笑いだす。

「「本物」か…。いいな、その言葉」

葉山の顔からすでに殺気だった表情はなく、優し気なものである。

「わかった。比企谷。君を手伝うよ」

「ほん…とか？」

正直言つて後半なにいつてるか自分でもわかってなかったんですけど。

「ただし、条件が二つある」

やはりそんなに甘くはなかった。葉山の顔はまた真剣なものだ。

「二つ目は比企谷が言う「本物」の「答え」を二人にいつかちゃんと伝えること。二つ目は、「雪ノ下陽乃」を味方につけることだ」

「うぐっ」

痛いところをついてくる。どちらにせよこの作戦は葉山隼人と雪ノ下陽乃両方を味方につけないと意味がない。

「言つとくが陽乃さんは俺ほど甘くないぞ。きつと『答え』をださない」と味方になってくれないぞ」

葉山の言う通りである。あの人を味方にするには一筋縄ではない。『答え』を持っていかないと納得してくれないであろう。

「それとついでにいつとくが」

葉山は部活に戻る準備でもしているのか、ストレッチをしながら答える。

「俺が今好きなイニシャルの『Y』は別の人だよ」

「え？それって…」

「じゃあ俺は部活にもどるよ、比企谷。がんばれよ」

そう言い残し葉山は俺の元から去っていった。

「さてと…」

残るは今までさんざん奉仕部をかき回してきた最終ボス。俺は今夜までにその最終ボスを『本物』の『答え』持って、闇の衣をはがし討滅しなければならぬのである。いや、討滅しちやまずいか。それどころかこつちが討滅されちやうまでである。最終決戦を前に俺は最後の晩酌にマツ缶を買に行くのだ。

……………やっぱり最後になつちやうのかよ。

「平塚先生」

「ん？なんだまだいたのか、比企谷」

一度職員室に戻り、平塚先生に声をかける。

「城廻先輩と一色に言伝頼んでいいつすか？」

「ほう、あの二人にもか。まあ当然だな。さっきの作戦の概要だけ伝えとけばいいのだろう？」

さすが国語教師である察しがよくてたすかる。

「雪ノ下には内緒でだな」

ますます察しがいい。この作戦は直前まで雪ノ下には隠していたほうが得策である。なにより、陽乃さんがキーパーソンになる以上、隠していたほうがいい。

「言っとくが比企谷、陽乃は手ごわいぞ」

「そんなことわかってますよ、ラスボスみたいなものですよ、あれは」  
最強装備、エリクサー何本もっていつでも安心して勝てる未来が想像できない。

「陽乃はな、私もずっと3年間気にかけていたんだよ。あいつが何か抱えていることはわかっていたのに、私にはなにもしてやることができなかつた。今の陽乃があるのは、私のせいでもあるんだ」

平塚先生が陽乃さんのことをそんな風に思っているとは思わなかつた。

「それは傲慢ですよ、平塚先生」

「わかっている、教師にできることはかぎられている。ただそれがたまに歯がゆくてな。今回もそうだ。君たちに今回私はなにもしてやれない」

今までになく、平塚先生はさみしそうにつぶやく。おそらくそれは、*「こないだの話」*にも関係してより一層責任を感じているのである。来年度おそらく自分がいないであろうということに責任を感じて。

「ともかくだ、今君にできることは陽乃を説得することだ。時間はあまりないがゆっくり考えて、自分の中で絞り出した*「本物」*の*「答え」*を陽乃に見せつけてやりたまえ」

「ええ、見せつけてやりますよ」  
そう力強く返事をしてみせた。

ピンポーン

以前雪ノ下が住んでいた場所、今は陽乃さんが使っているはずだ。

インターホンを鳴らし、家主が出てくるの待つ。

『はいはい、比企谷君かな?』

インターホン越しから聞こえてくる声はいつも通りの陽気な声だった。

「さっきの話の件でできました。あけてもらっていいですか?」

『ほうほう。ということは私が納得する「答え」をもってきたんだね、いいよ、開けてあげる』

オートドアが開錠され、部屋へと向かう。

「てつきり3人で来てくれると思ったんだけどな」

ドアを開けこちらが一人なのを確認するとそう言う。その言葉は少し冷たく、いつもの陽気な感情がこめられてなかった。

「今回は俺一人で来ました。多分いつか「3人」で話すことになると思います」

「ふーん、まあいいや、上がって」

部屋の中に招き入れてもらう。前回のようにお酒を飲んでいる様子はなかった。

「それじゃあ聞かせてもらおうかな、比企谷君の「本物」がなんであるかを」

「ええ、聞いてもらいますよ俺の「本物」」

「それが比企谷君の「本物」?」

こちらに向けてくる目はきびしい。だが、これ以上の手はない。雪ノ下の「本物」も、由比ヶ浜の「本物」もここにはない。ただ、おれが提示できる今の「本物」は俺の分だけである。

「その答えで私が納得できるとでも?」

挑発的な笑みでこちらを見てくる。わかっている、これは確かに俺の「本物」であるが「本物」として成立させるには俺一人では足りない。

「足りないってわかって、あえて一人できたんだね。どうして?」

どうしてって聞いてくるのはこの人のいじわるなことだ。

「少なくとも俺の『本物』の見せました。そして約束します。この話の続きは必ず3人で陽乃さんの前で話して見せます」

「ふーん」

陽乃さんはこちらの様子を見ながらそして珍しく指を口に当てながら考えている素振りをみせた。

「君は強くなったね。一人でそんなことを言いきっちゃって。もしかしたら今君が語った『本物』は偽物なのかもしれないよ。いつか自分でもいつてたじゃない、一方的な願望の押し付けは、『本物』とはよべないって」

「その通りです。でも俺はあの二人に賭けたんです。あの部室で過ごしてきた時間はまぎれもなく『本物』だから。あの二人になら、願望も自己満足も押し付けて、許してくれるって俺は信じているんです」  
「言いたいことは言い切った。完全なる唯我独尊であることもわかってる。だが、今おれにできることは『あの二人』を信じ、押し付けるだけである。」

「面白いとは思っていたけど、ますます面白くなったね。君は」  
陽乃さんの顔はいつもとは違う笑顔で、その笑顔は本当に優しかった。

「じゃあ、あとは雪乃ちゃんと由比ヶ浜ちゃんの『答え』しただいね」  
背筋を伸ばしそう言う陽乃さん。

「それじゃあ協力してもらえますか？」

「いいよ、それにそっちのほうがおもしろそうだし」

まさか本当にただ面白いからこっちの作戦に乗るとか単純な理由じゃないでしょうね？

詳細な作戦の説明をしたところで俺は席を立つ。

「それじゃあ俺はここで失礼します」

「えーそんなこといわずにもうちよつとお姉さんと話していこうよ」  
陽乃さんはすっかりいつもの調子に戻り、甘い言葉をささやいてくる。ちよつとやめてくださいよ。そんな甘い声で年若い学生を惑わすような言葉をかけてくるのは。

「今日はありがとうございました。また連絡します」

「はいはい、それじゃあね、比企谷君」

甘い誘惑に負けない間に、俺はその場をあとにした。

---

比企谷君は気づいていないのであろう。比企谷君がだした答えは紛れもない「本物」だ。でも悲しいことに「本物」が必ずしも正しいとは限らなくて、「本物」であるがゆえに悲しい事実が生まれてしまうことを彼は知っているだろうか。あの3人が待ち受けている苦難は間違いなく、今までで一番大きなものになるだろう。そしてどうか逃げずにどうか立ち向かってほしい。「本物」を手に入れるということは、楽な「偽物」ではもういられないのだから。

## “本物”よりも“偽物”を求めていた

葉山と陽乃さんとの協力関係を取り付けた次の日。朝登校してみると下駄箱のところである人物がおれを待ち伏せていた。

「おはよう、比企谷君」

「む、お、おはよう」

朝から意外な人物に会い多少戸惑ってしまふ。いや、冷静に考えてみれば意外ではないのかもしれない。今は実家にいるはずだからすぐに連絡が届くはずだ。

「比企谷君、あなたなにか知らない？」

「そんな主語がない質問はお前らしくないぞ、雪ノ下」

質問内容はわかりきっている。中止決定されていたプロムの中止が先延ばしに突然になったのだ。誰かの差し金があったとおもうのが当然だ。

「そう、ならいいのだけれど」

雪ノ下は疑問をぬぐえない顔をし、そしてこちらを疑う顔は変わらない。

「念のためもう一度聞くけれど、本当に今回の件比企谷君はかわつていないのよね？」

「しつこいぞ、悪いが俺には何の話かさっぱりわからん」

「そう、そうよね。そもそも、あなたにそこまでの力があるとはおもえないし」

そう自分に言い聞かせるかのような言葉を放つ。

「それじゃあまた」

「おう、また」

雪ノ下と別れ自分の教室へと向かう。最後まで腑に落ちない顔であったがここで雪ノ下に作戦の全容を話すわけにはいかない。もし話してしまったら、おそらく雪ノ下は反発してしまうであろう。だが、俺はこの作戦を必ず成功させてみせる。助けると約束したのだから。

「由比ヶ浜、ちよつといいか」

教室へ入り、由比ヶ浜を呼び出す。いつものグループの中にいる由比ヶ浜を呼び出すのは少々抵抗あったが、この際仕方ない。

「ヒツキー…」

そこにはいつもより元気がない由比ヶ浜の顔があった。元気がない理由に全く心当たりがないわけでもない。だがしかし、今話しておかなければならない。

人があまり通らない廊下まで連れて歩く。ここにくるまでずっと由比ヶ浜は暗い顔をし、うつむいたままだ。

「昨日の件の話だが、一応由比ヶ浜にも伝えておこうとおもつてな」

「う、うん！私もなにがあったか知りたいな」

昨日あった出来事を話し、これからの作戦を伝える。

「そっか、じゃあゆきのんにはギリギリまで伝えないんだね、作戦のこと」

「ああ、ギリギリつうか最後まで言わないつもりなんだけど、まあ最後にばれちまうけどな」

ばれたときの雪ノ下の怒った顔は想像したくない。それに怒るだけならばかまわない。いつかのときのように全てをあきらめてしまわないか不安である。しかし約束したのだ。言われたのだ。『いつか私を助けてね』と。ここで助けを出さなければ必ず後悔する。

「ヒツキー…」

由比ヶ浜が心配そうにこちらを見てくる。いつかのときのような結末になるのではないかと心配しているのだろう。いや、それだけではない。由比ヶ浜も感じているのである。このプロムのイベントが成功しようが失敗しようが明らかにしなければならぬことがある。

「大丈夫だ。由比ヶ浜、いつかのときみたいな…」

「違うよ、ヒツキー！私が言いたいのは…。私が…言いたいのは…」

由比ヶ浜が声を上げる。目に涙をためながら。胸にチクリと何かがささる。

キンコンカンコーン

予冷のチャイムが鳴り響く。



「ご、ごめんね、ヒッキー。さ、戻ろう！」

由比ヶ浜はためた涙を素早く袖でふき取り先に教室へと駆けだす。由比ヶ浜の涙を見た瞬間。胸が揺れ動く。今俺がしようとしていることは、そしておれが“本物”だと思っていたものは本当に正しかったのであろうか。おれはまた間違えてしまうのではないかと不安に陥ってしまう。だがもう止まるわけにはいかない。もう計画は走りだしてしまっているのであるから。

涙のコントロールができない。彼が彼女の名前を出すだけでつらくなってしまう。彼女のために何かをしようとしているだけで胸が熱くなって、目が熱くなって止まらない。

彼は“本物”を手にするために、必死に手を伸ばそうとしている。でも、私はその“本物”を手にしてほしいと思えない。

私は、ずるい子だ……………。

結局私は“偽物”を求めてしまった。

放課後になり動き出す。やることは山ほどある。協力者は多いほど助かる。

「戸塚、ちよつといいか？」

部活に行く前の戸塚を引き留める。

「なに？八幡」

笑顔での対応がまぶしい。可愛い。結婚したい。いや、だめだ。ここで結婚したらハッピーエンドでこの物語終わっちゃう。ハッピー

エンドなのかよ。

「実はな、また手伝ってほしいことあるんだが、いいか？」

「いいよ、八幡の頼みなら」

「やっぱり結婚したい。」

「なんかちよつと意外だね」

「意外？」

「なんか八幡っぽくないっていうか。でもあれだよ、八幡っぽくないけど今までの八幡のやり方で一番好きだよ」

やり方を褒められるのは初めてかもしれない。今までのやり方はその場しのぎで、問題から避けてきたやり方であったから。

「じゃあ頼む」

「うん、任せて八幡。じゃあいくね」

戸塚を送りだし、次の場所へと向かう。次の場所へ行くには注意が必要だ。あれこれ動いていることが雪ノ下に動いていることはまだ知られてはいけない。

職員室へと向かう。それまで手にしてこなかった鍵を手に入れるため。

「平塚先生、部室の鍵受け取っていいですか？」

「来たか、比企谷。城廻と一色なら君の言われた通り呼び出しといた。雪ノ下なら私が足止めしとくから安心したまえ」

平塚先生の机は、前とも比べてますます片付いていた。

「まさか、本当に陽乃を味方につけるとはね。正直、驚いたよ」

「いえ、今回は正直妥協してもらっただけです。まだ決着はついてませんよ」

言葉の通りだ。あの人はまだ納得しきっていない。あの人を納得させるには“3人”で話にかなげなければならない。だが、心のどこかで不安がある。さっきの由比ヶ浜の顔を思い出すと、結局自分が押し付けていただけではないのかと。しかし“本物”を手に入れるには、押し付けることがそもそも前提なのだ。

「さすが陽乃だよ、仕事が早い。三日後に保護者と生徒と交えた会議を行うことが決まった。そこでプロムがどうなるかが最終決定され

るだろう。比企谷、この三日でできることはあまりにも難しいぞ」「わかってますよ。ただ、このままにはしておけないだけですよ。それじゃあ」

職員室を後にする。部室にはいつもの二人はいない。雪ノ下は自分一人でやり通すことをきめ、由比ヶ浜はそれを見届けると言ったのだから。そして俺は助けることを決めた。

押し付け、自己満足に浸って、信じて、ただ目を背けてはいけない。「本物」を手に入れるためにはまず「偽物」を「本物」と決めつけて前に進むのしかないのだから。

一色いろはは「本物」をとりこぼす

「おっそいー先輩」

奉仕部の部室の前で待っていた二つの人影。そのうちの一つがいつものあざとい声で近寄ってくる。

「すまんすまん、今部室開けるから。城廻先輩も、お持たせして申し訳ないっす」

「いいよいいよ、私たちも今きたとこだから」

部室の鍵を開ける。扉をあけるとそこには誰もいない。もしかしたら、部室に誰もいない光景を見るのは初めてかもしれない。誰もいない部室、なぜかその光景をみると寂しさを覚える。遅かれ早かれこの部室が空になって、奉仕部がなくなることとはわかりきっている。ただ、この誰もいなくなってしまうている部室が心に突き刺さる。

「先輩、どうかしたんですか?」

「いや、なんでもない」

部室へと足を踏み入る。続けて一色と城廻先輩も部室へと入る。

この三人で部室に入るのは妙な光景である。

「それで比企谷君、私達が呼び出されたのって?」

「平塚先生から少しは聞いてますよね? 作戦のこと」

一色と城廻先輩はうなづく。

「これから話すのは表向きの作戦とこの作戦の全容です」

「数には数を…作戦ですか?」

「そうだ雪ノ下」

生徒会室で平塚先生は今回のプロムのイベント中止の打開案としてそんな作戦名を口にする。

「随分単純な作戦ですね。生徒からプロム開催の賛成署名を集めて保

「護者会に提出するというのはあまりにも安直ではありませんか？」

「確かに。だが、向こうが中止に追い込んだのも保護者の多くを味方につけたからだ。ならばこちらも数で対抗するしかあるまい」

「確かにその通りだ。向こうが数で推してきた以上。どちらにせよこちらも少数ではいられない。できる限り多くの味方をつけておく必要はある。」

「それで具体的な中止決定を覆せる必要数はいくらだと思えますか？」

「君らしくないな、雪ノ下。その程度の計算、君のなかではもうとつくだでているだろう」

「……………全校生徒の過半数、いえ、3分の2以上ぐらいでしょうか」

「その通りだ。できればそれどころかほとんどの生徒の賛成がほしいといつても過言ではない」

「厳しすぎる数字だ。残り三日でそれだけの数を集めるの無謀にも等しい。一色さんに頼んで校内放送で呼びかけたところで4分の1も署名は集まらないだろう。」

「今城廻と一色が署名を集めるために校内中をかけめぐっている。これで署名も多少は集まるだろう」

あの二人だけでは署名の数は足りない。もっと協力者がいる。

「わかりました。私のほうでも協力者のほうでできる限り探してみます」

生徒会をあとにしようとする。後ろから声がかかる

「こちらのほうで既に葉山隼人は味方にしてある。安心したまえ」

意外な人物が出てきた。彼の両親はこのプロムに反対していると聞いていた。立場上、こちらの味方にはつけないと思っていた。

「先生、あの約束は守っていただけでますよね？」

本来味方につけることが難しい葉山君を巻き込んでしまえる人物に心当たりがある。この事態を知られたくない人物がいる。この事態を知られてしまえば、彼はきつと見届けることをやめてしまうから。

「ん？比企谷に黙っておくという件か？もちろんまだ黙っているが、

遅かれ早かれ署名活動を始めてしまえば感づかれてしまうぞ」

「その程度なら構いません。プロム開催に賛成署名を集めることはそこまで不自然じゃありませんし、こちらの内部事情さえ知られてさえなければいいです」

彼を巻き込むわけにはいかない。巻き込んでしまえば私は結局彼から離れられなくなってしまう。それでは今までと変わらない。変わらなければいけないのだ。『彼』にいつまでも依存してしまうわけにはいかないのだから…。

「これが当日の作戦です。根回しはすんですが、それでも正直上手くいく可能性は低いです」

城廻先輩と一色に説明し終わる。

「わかった、それじゃあ私達は表向きの作戦に全力を注げばいいんだね？」

「はい、お願いします。どっちにしてもこの作戦は、表向きも成功しないという意味を成しえませんが」

「君は変わったね、昔と」

「え？」

「君のことだから、もっと最低な作戦がでてくると思ったよ」

城廻先輩は、皮肉めいて微笑みながらそう言う。

「わかった、それじゃあ3年生のほうは任せて。できる限り多くの署名集めてみせるよ」

「お願いします」

城廻先輩は席を席を立ちこの場あとにしようとする。だが、いつものあざとい後輩はその場を動かない。

「ごめんなさい、城廻先輩。先行ってもらっていいですか？私、先輩に

まだちよつと話があるんで」

一色からはいつものあざとさを感じない。むしろ真剣な顔つきである。

「うん、わかった。じゃあ行ってくるね」

城廻先輩はその場をあとにする。残された俺と一色には沈黙が漂う。先に言葉を切り出したのは一色だった。

「先輩」

その言葉は重く、だけどまっすぐに、

「これって先輩が『本物』を手に入れるためにやってることですか？」

痛いところをついてくる。恥ずかしくなってくる。恥ずかしくて死んでしまいそうになる。

「ま、まあそんな感じだ」

？をついてもしょうがない。あの日の会話を一色に聞かれてしまってる以上隠す必要もない。それになにより、一色も『本物』がほしくなったといっていたから。

「このイベントの先に先輩のほしかった『本物』があるんですね」

一色はさみし気な顔をする。そして聞き取れない小さな声で

「私のほしかった『本物』はまた遠くなくなってしまいました」

「え？なんだって？」

「いいえ、なんでもありませんよ」

どこかの難聴主人公でもあるまいのに、一色の言葉を聞き取れなかった。最後の一色の顔はいつものあざとい後輩の顔に戻っていた。

「それじゃあ一色も署名の件頼む」

「はい」

一色もその場をあとにしようと席を立つ。ただ、ただなんとく、このまま一色を行かせるのは忍びなくて

「一色」

「はい？」

立ち去ろうとする足をとめる。

「ありがとな」

その言葉を聞いた一色は一瞬少し驚いたような顔して、そしていつもの調子で

「なんですかもしかしてちよつといつもと違う優しい言葉をかけて私のこと口説こうとしてます？ちよつと遅すぎなのでごめんなさい」

最後にニコつとあざとく笑顔でそう返し、後輩はその場をあとにするのだった。

少しいつもと違ったような断り文句をしたのは俺の気のせいだったのであろうか…。

---

遅すぎたのだ。私が欲しかった“本物”は目の前にあったのに。私も“本物”が欲しくなったから、“本物”を手にするためにあの日一歩踏み出して告白した。見つけた“本物”に向かいだすために。でも私は結局みすみす“本物”を逃してしまったのだ。

「あーあ」

自然と声がこぼれる。涙が流れているのがわかる。

………そう、遅すぎたのだ、私は。